

Title	スピノザにおける感情と観念
Author(s)	中田, 勝也
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1997, 31, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10309
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スピノザにおける感情と観念

中 田 勝 也

「愛、欲望のような思惟の様態、その他すべて感情と呼ばれるものは、同じ個体のなかに愛され、望まれたりするものの観念がなければ存在しない。一方、観念は他の思惟の様態がなくても存在しうる」(E2A3)

スピノザは、『エチカ』第二部において以上のような公理を掲げている。これは、「観念 idea」が「感情 affectus」に対してなんらかの優先権を保持していることの表明であると考えられよう。実際、あらゆる思惟の諸様態において「観念が本性上第一のものであり、観念が与えられればその他の諸様態が同じ個体のなかになければならない。したがって観念は人間精神の存在を構成する最初のものである」(E2P11D) とさえも言われているのである。そこで、この「感情」と「観念」との差異と、両者の関わりを以下における主たる考察の対象とし、先の公理でいわれていることの意義を明らかにしたいと思う。まずは「感情」の考察から始めたい。

I

たとえばデカルトは、基本感情 affectus primarius を以下の六つ、すなわち「驚き l'Admiration」「愛 l'Amour」「憎しみ la Haine」「欲望 le Désir」「喜び la Joie」「悲しみ la Tristesse」に分類しているのだが¹⁾、これに対してスピノザはそこから、「驚き」「愛」「憎しみ」の三種を除外し、基本感情を「欲望」「喜び」「悲しみ」の三種類としている。したがって、前者三種はいかなる理由で基本感情のうちに数えられることができな

いのか、そうした事情をそれらの定義から確認してみよう。まず「驚き」とは、スピノザによれば「それまではまったくみなかったような特別なものを表象する」(E3P52D)に際し、その「表象が他のものの表象と何ら結びつきを持たないので、精神がそれにとらわれたままでいるような表象である」(E3AD4)。この「驚き」を「感情のうちに数え入れないし、またなぜにしてそうしなければならないのかわからない」とスピノザが述べる理由は次のごとくである。つまり、精神がある表象にとらわれたままで他の表象から隔離されているといった状態は、「精神を他のものから引き離すための積極的な原因によっておらず、精神があるものの観想から他のものを思惟するように決定する原因がただ単に欠けている」ことに基づくからということになるだろう。とりあえずここにおいては、「ものの表象像 *imagines* が互いに結びついて、一が他に継いで起きるように秩序付ける」

(E3AD4Ex) という、いわば「連想」「想起」を可能とするような原因に欠けるゆえ、精神が一つの表象を単独でうちに留めることとなり、結局精神に何らの変化ももたらされないから、スピノザにおける「驚き」は「感情」のうちには組み入れられないという理由でよしとしたい。

では、「愛」と「憎しみ」はどうであろうか。「愛とは外部の原因の観念をともなう喜び」(E3P13S、E3AD6)であり、「憎しみとは外部の原因の観念をともなう悲しみ」(E3P13S、E3AD7)であるとそれぞれ定義されている。したがって、結局「愛」は「喜び」の一つとして、「憎しみ」は「悲しみ」の一つとして考えられるのだから、基本感情のうちに含まれなくてもよいというわけである。

そこでわれわれとしては、「喜び」「悲しみ」「欲望」の三つが「感情」においていかに基本的であるのかを検討しなければなるまい。まず「愛」「憎しみ」がそれぞれ還元されうるといふ「喜び」と「悲しみ」について見てみよう。それらの定義は以下のようなものとなっている。「喜びとは人間が

より小さな完全性からより大きな完全性へ移行すること」(E3AD2)であり、そして「悲しみとは人間がより大きな完全性からより小さな完全性へ移行すること」(E3AD3)である。この「完全性 perfectio」とは「实在性 realitas と同一のもの」(E3D6)、あるいは「あるものがある仕方 で存在し作用するかぎりにおいては、その本質」(E4Pref)のこととされる。しかしここで注意しなければならないのは、スピノザが「移行 transitio」を強調している点である。「私は移行という。というのも、喜びは完全性そのものではないからである。実際、もし人間が自らそこへむかって移行してゆく完全性を生まれながらもっているならば、彼はそれを喜びの感情なしに所有したであろう」(E3AD3Ex)。つまり、人間はある一つの完全性のうちにとどまっているかぎりにおいて「喜び」の「感情」も「悲しみ」の「感情」ももたないのであり、それらが生じるのは完全性のある状態から他の状態への「移行」においてというわけである。先に「驚き」が「感情」から除外されたのも、精神が一つの表象にとどまり続けるためにこうした「移行」が成立しないからだといえる。いずれにしろこれまでの考察が示すのは、「完全性」、言い換えるなら「人間がある仕方 で存在し作用するかぎりにおいては、その本質」がそれまでとは異なった状態へと「移行」しなければ、「感情」は生じることはないという事態である。

II

では基本感情の残りの一つ、「欲望」はどうであろうか。「与えられたなんらかの変様によって、人間の本質があることをなすように決定されると考えられるかぎりにおいて、欲望とは人間の本質そのもの」(E3AD1)である。したがって「欲望」が「人間の本質」であるとされる以上、「欲望」はただ基本感情として「感情」の基底をなすばかりか「人間」のそれをもなしているのだととりあえずいえそうである。しかしまた「欲望とは、それ

自身についての意識をともなった「衝動」(E3P9S)としても定義されている。したがって、それが一種の「衝動」であるともいわれる以上、さらに「衝動 appetitus」についての『エチカ』の記述を追ってみると、はたして「衝動」とは「人間の本質が、自己の維持に役立つことをなすように決定されるかぎりにおいて、人間の本質そのもの」(E3AD1)といわれるのである。したがってまた「衝動」も、「感情」の基底をなすばかりか「人間」のそれをもなしているのだといえまいか。実際のところ、「自己の存在に固執しようと努めるコナトゥス(努力) conatus」が「精神と身体に同時に関係するときには衝動と呼ばれる」(E3P9S)ともいわれるのだから、そしてこの「コナトゥス」とは、「そのものの現実的本質」(E3P7)なのだから、「衝動」はたしかに「人間の本質」として名乗りをあげる資格を十分にもっているといえるだろう。

ところで、いわゆる「本質」とは「それなしにはものが存在することも考えられることもできないもの」(E2P10S)と規定しよう。しかしながらこの点を考慮するならば、スピノザいうところの「衝動」はいったいどの程度まで「人間の本質」たりえているのかについて、疑義が差し挟まれるにちがいない。というのも、また別のところで「衝動」は「われわれにあることをなさしめる目的のこと」(E4D6)と定義されているからである。つまり、「衝動」が「目的原因 causa finalis」だとすれば、たとえば「居住する」という「衝動」が「このまたはあの家屋の目的原因」といわれるならば、それは「人間が屋内の暮らしの快適さを表象したために、家屋を建てようとする衝動を抱いた、ということに他ならない」(E4Pref)だろう。しかしそれならばこのとき「衝動」は、「衝動」が自らを差し向ける対象として自らが表象したところの「表象像 imago」の結果物とみなされ、この「表象像」にまったく従属することとなり、したがって「表象像」こそが「衝動」にもましてより本質的なものとしての地位を獲得することとなってし

まうではないか。

もちろんこの「衝動」は「実際には（本当のところは）revera 起成原因 causa efficiens なのである」（*ibid.*）²⁾。そこで、同じ例でもってスピノザの「衝動」を述べるならば、くわれわれが「家を建てようとする衝動」を抱くのは、われわれが屋内生活の快適さを表象し、それを自己にとってよりよきものと判断する結果としてではない。そうではなくて、家を建てようと欲するがゆえに、そこでの暮らしの価値が認められるのだということとなろう。したがって「衝動」が「目的原因」とみなされるのも、「人間の衝動がなんらかのものの原理、あるいは第一原因 causa prima とみられているかぎり」（E4Pref）といった条件下においてである。というのも、「衝動」を「目的原因」とみなすこと、それはすなわち「衝動」を「第一原因」とみなすことに他ならないからだ。したがって、本来「起成原因」たる「衝動」が「目的原因」とみなされるという倒錯的な事態のうちには、以下のような事情が存していることになる。まず「人間は自己の行為と衝動を意識しているが、あるものへと衝動を抱くべく彼らを決定する諸原因には無知」（*ibid.*）ゆえに、自らの「衝動」を、それに先立ちそれを可能としているような根拠を持たぬ「第一原因」、言い換えるならば「自由な主体」とみなしてしまい、そして次にこの「衝動」の向けられる対象として表象された「表象像」のうち、この「自由な主体」の担う多様な選択可能性を一つの像へと拘束する理由を想像的に見つけ出すことで、倒錯的に「表象像」を「衝動」よりもいっそう本質的なものとみなしてしまうのである。

「衝動」が、こうしたいうなれば「目的論的転倒」といった事態を被るのであれば、「欲望とは意識をともなった衝動」（E3P9S）であり、そして「人間が自己の衝動を意識しようとしまいと衝動自体は同一にとどまる」ために、「実際には衝動と欲望との間にいかなる相違も認めない」（E3AD1Ex）といわれるのだから、「欲望」もまたこの「目的論的転倒」

を免れえまい。事実い^わゆ^る「^欲望」とは、「^衝動」と同様に、「それによつて精神がものを欲求したり拒んだりするところのもの」(E2P48S)として、欲したり欲しなかつたり、いかようにもしうるとい^う「^自由な^主体」を要請するものといえよう。いずれにし^ろ「^基本^感情」の一、「^欲望」は、「概して人間は、自身の衝動の原因を知らない」(E4Pref)ために「^目的・^第一^原因」としての「^表象^像」に従属するという転倒を演じてしまうのである。

III

しかしながらこうした「^表象^像」による「^衝動」の支配といった転倒は、人間精神にとってある種必然的な帰結であるときえ言えるかもしれない。というのも、「人間は自身の衝動の原因を知らない」というこの転倒にとっての条件、それは実を言えば、まさにスピノザにおける人間精神にとってののっぴきならない必然的な条件でもあるからである。したがってそれは、すでに確認した基本感情の二つ、「^喜び」と「^悲しみ」における「^移行」の必然的条件でもあるだろう。われわれはそれを「^感情」の定義のうちに見出すことが可能である。スピノザによる感情の定義は以下のとおりである。「^感情とは、われわれの身体の活動能力を増大あるいは減少し、促進あるいは阻害する身体の変様、そしてそうした変様の観念である」(E3D3)。つまり「^感情」は、「身体の活動能力の増大あるいは減少、促進あるいは阻害」という「^移行」状態と、「^身体^の変^様およびその変^様の^観念」という二つの論点によって規定されるのだが、未検討の後者の論点こそが、「^移行」とともに、先の「^欲望」「^衝動」の「^目的^論的^転倒」という事態をも説明してくれるというわけである。

たとえば「^喜び(^悲しみ)」は、「^移行」によって定義されるが、別の箇所ではそれぞれ「^精神がより大きな(小さな)完全性へ^移行する^受動」

(E3P11S) とされるのだが、この「精神の受動」という概念はまさに「身体の変様」に関わるものである³⁾。「感情あるいは精神の受動はある混乱した観念」(E3AGD) であり、また「精神の受動は非完全な観念だけに依存する」(E3P3)。一方、「人間身体の変様の観念」も「ただ人間精神に関係しているかぎり、明晰判明なものではなく混乱したもの」(E2P28) といわれる。なぜならば、「人間身体」は外部の物体によって刺激されるのだから、「人間身体変様の観念」は当然ながら「人間身体の本性ととも外部の物体の本性を含まねばならない」(E2P16)。ところがこの「身体が受ける変様(刺激)の観念」が、身体およびそのきわめて多くの部分とともに外部の物体をもその原因として持つがゆえに、「人間身体変様の観念」は、「人間身体そのものの完全な認識を含まない」(E2P27) し、「外部の物体の完全な認識を含んでいない」(E2P25) ことになるのである。したがって「人間身体変様の観念」は「混乱した観念」であるとともに「非完全な観念」であるといえよう⁴⁾。こうして「精神の受動」としての「喜び」と「悲しみ」は、まったく「身体の変様とその観念」に依存していることがわかる。こうしてみれば、「移行」とは〈身体変様〉の刻一刻の変化に寄り添う精神の状態の変化〉なのである。

また「人間精神が、自己の身体の変様の観念によって、外部の物体を観想 *contemplari* する際、精神がものを表象する *imaginari* とわれわれは言う。しかも精神は他の仕方では外部の物体を現実存在するものとして表象しえない」(E2P17S)。すなわち「人間精神は、自己の身体の変様の観念によってのみ、外部の物体を現実存在するものとして知覚する」

(E2P26) のであり、またこうして知覚されるものが「表象像 *imago*」である。ところで「感情」とは、「身体的活動能力の移行をとまなう身体の変様とその変様の観念」であった。したがって「表象すること *imaginari*」は、あらゆる「感情」につきまとう一特質であるだろう。「愛」や「憎しみ」

の「感情」を抱く精神は、それぞれ「愛するもの quod amat」「憎むもの quod odio habet」を表象する。また「喜び(悲しみ)」は「自分の愛するものが保持(破壊)されることを表象する」(E3P19)。ところで、こうして「ものを表象する」ときに「精神」が依存しているところの「人間身体変様の観念」は、すでにみたように「混乱した、非完全な観念」であった。「起成原因」としての「欲望」「衝動」が「目的原因」とみなされることで「表象像」に従属するという、先の「目的論的転倒」の条件を、「身体変様の観念」が担っていることのうちにはこうした理由が存するのである。さらにいえば、現実存在する有限様態の「現実的本質」とされる「コナトゥス」にまでも、この「目的論的転倒」の射程は及ぶといわざるをえない。というのも「コナトゥス」は、「精神と身体に同時に関係するときには衝動と呼ばれ」(E3P9S)るし、また「欲望とは、それ自身についての意識をもなった衝動」(E3P9S)のことだからである。

こうしてこれまで考察に及んだ諸感情はすべて、自らの「起成原因」たるべきでありながら、むしろ「人間身体の変様とその観念」のみに依存するかぎり「目的原因」とみなされ、「目的論的転倒」を被ってしまうのである。ところが、われわれがまだ議論の俎上に乗せていない思惟の様態がある。それは「意志 voluntas」である。この思惟の様態は、「コナトゥスが精神のみに関係するとき」(E3P9S)にそのように呼ばれるというその性格が、「感情」の考察において有力な手がかりとなるのである。

IV

スピノザにとって「意志」は、「それによって精神がものを欲求したり拒んだりするところの欲望」(E2P48S)ではない。したがってそれは、「意志したりしなかつたりという絶対的な能力」(E2P49D)や「自由意志」ではない。神に対して「自由意志」が認められないのと同様に、人間精神に対

しても「自由意志」は認められないのである。「精神のうちには絶対的な意志、すなわち自由な意志はない」(E2P48)。つまり「意志」は「自由な原因とではなく、必然的な原因とのみ呼ばれうる」(E1P32)のである。したがって、「意志」は必然的に「真なるものを肯定し、偽なるものを否定する精神の能力」(E2P48S)なのであって、「真なるものを否定し、偽なるものを肯定する」という自由を持たないのである。だから、「意志」には「意志」を越えることはできない。したがって、たとえば「愛とは、愛する対象と結合しようとする愛する人の意志であるという定義は、愛の本質ではなくてむしろその一特質にすぎない」(E3AGD6Ex)。というも、このとき「意志」は「愛する対象が不在ならば自らをそれに結び付けようとし、それが存在するときにはその現在に固執しようとする欲望」(ibid.)ではないからである。むしろそれは、「愛する対象の現在ゆえに愛するもののうちにある満足」(ibid.)である。その意味において「意志」は、自らを超出して対象の側へと差し向けられる精神の運動というよりは、一貫して自らの側でそれ自身によって受け取られている思惟の様態といえる。しかし、たとえ目指された目的としての対象への到達の可否が問われているのではないにもかかわらず、この対象の現在・非在により「感情」が満たされたり満たされなかつたりする以上、結果的に「意志」でさえも「目的論的転倒」を被りうるわけである。したがって、われわれは「必然的に肯定し、否定する精神の能力」としての「意志」において、その「必然性」の根拠となるものの考察に移らねばならない。実を言えば、「コナトゥスが精神のみに関係するときには意志と呼ばれ」(E3P9S)ることのうちに、そのものの無視しえない意義がひそかに表明されている。この「必然性」を担うもの、それは「観念」である。

「感情」の特性である「移行」は、実は「観念」によって説明されねばならない。たとえば、精神の「より大きな完全性への移行」である「喜び」

とは、精神が「自己の身体またはその一部について、以前より大きい存在力 vis existendi を肯定する」(E3AGD) ことであるが、この「以前より大きい存在力を肯定する」というのは、「精神が身体の現在の状態を過去の状態と比較するという意味ではなく、むしろ感情の形相を構成する観念が、身体について以前より大きい実在性を実際に含むようなあるものを肯定するという意味」(E3AGDEx) なのである。したがって「悲しみは、より大きな完全性の欠如に存するとは言えない」(E3AD3Ex)。というのも「欠如」とは、〈ありうべきはずのものがないこと〉として比較概念に従属しているからだ。ところが、「悲しみ」は「一個の積極的状态」(ibid.) として「観念」により肯定されているのである。こうして「感情」は、身体の現在の状態と過去の状態とを反省的に比較考量するという精神の理性的認識作用によってではなく、「観念」自体の「肯定するという能力」により説明されねばならない。つまり、「精神のなかには観念が観念であるかぎりにおいて含む以外のいかなる意志作用も、すなわち肯定または否定もない」(E2P49)。先に「意志」が「肯定し、否定する精神の能力」であるとされたが、実は「観念」こそが、それが「観念であるかぎりにおいて肯定または否定を含む」(E2P48S) ののである。

「目的論的転倒」はしたがって、最終的に「観念」と「われわれが表象するものの表象像」(E2P48S) との混同にその根拠を持つ。たとえば「われわれの脳髄に何らの痕跡を残しえないものの観念は、実は観念ではなく、われわれが自由意志によって任意に捏造する虚構にすぎないと確信する」(E2P49S) 人は、かえって「観念」を「脳髄に何らかの痕跡を残すもの」あるいは「眼底(脳の真ん中)につくられる表象像」(E2P48S) とみなし、「観念」を「画板の上の無言の絵のごとく眺める video」(E2P49S) だけなのである。したがってまた彼は、「観念」が肯定することに反してなされる言明は単なることばの表明にすぎないにもかかわらず(ibid.)、人は

「観念」に反して言明するべく意志しようと信じるゆえに「目的論的転倒」を遂行してしまうのである。しかしわれわれは「観念」を偽ることはできない。というのも「観念による肯定・否定」とは、「観念が観念であるかぎりの肯定・否定」だからである。したがって「観念」は、まさに「観念」であるがゆえに「観念」として自らの能力を必然的に発揮するのである。

本論冒頭の公理は、以上のような「観念」と「感情」の性格によって説明される。「愛、欲望のような思惟の様態、その他すべての感情」を持つ人は、それらの向けられる対象として表象されるものの「観念」をも伴いつつ「身体」の側で変様を被っている。もちろんそこには「身体のある状態から他の状態への移行」がともなっているだろう。しかしそのことが、「思惟」の側ではつねにそのような「観念」として、「移行」については「移行」の「観念」として必然的に表され、肯定されているわけである。つまりあらゆる「思惟の様態」は「観念」により肯定され、「観念」として知られているのである。したがって、公理後半に「観念は他の思惟の様態がなくても存在しうる」といわれるのは、この場合なにもものについての「観念」でもない無色透明な「観念」、いわば「純粹観念」の存在のことではない。「人間精神を構成する観念の対象は身体、または現実に存在しているある延長の様態であってそれ以外のいかなるものでもない」(E2P13)のである。よって「観念」は他の思惟の様態とともにある。ただそのともにあるあり方が、「観念が与えられればその他の諸様態が同じ個体のなかになければならない」(E2P11D)というあり方であるという意味で、あらゆる思惟の諸様態において「観念が本性上第一のもの」なのである⁵⁾。

注

スピノザのテキストの引用と参照はゲプハルト版全集 *Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von

Carl Gebhardt, C.Winter, Heidelberg により、以下のように略号化して本文中に示すことにする。E 1は『エチカ (ETHICA)』第1部、Pは定理、Dは定義、Aは公理、定理の後のDは証明、Cは系、Sは備考、ADは感情の定義、AGDは感情の一般的定義、Prefは序文をそれぞれ表す。なお、傍点はすべて筆者による。

- 1) Cf.R.Descartes, *Les Passions de l'âme*, Art 69, *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch.Adam & P.Tannery, Vrin, XI, 1964-74, Paris, p.380.
- 2) 実際には「衝動」は他の原因によって決定されている。したがって「個々の衝動」は、後に述べられる「意志」と同様「他の原因から決定され、この原因もまた他の原因から……」というように有限な原因の無限連鎖により決定されているだろう。とはいえ、スピノザにとって、最終的には「神が、無限の知性によってとらえることのできるすべてのものの起成原因」(E1P16C1)である。
- 3) 本論では文脈上、「非充全で、混乱した観念」に基づくかぎりの「精神の受動」的側面をなしている「感情」を取りあげているが、もちろん「感情」には「受動で真なる観念」に基づく「能動的であるかぎりの精神に関する感情」もある。
- 4) 拙論「スピノザの精神、身体とその変様」(『カルテシアーナ』第14号、1997) 参照。
- 5) 「観念は他の思惟の様態の十分条件」であり、「他の思惟の様態は観念に必然的に依存している」とゲルーは言う。Cf. Martial Gueroult, *Spinoza II*, Aubier・Montaigne, 1968, Paris, pp.32-33.

(大学院後期課程学生)